

江戸東京

たてもの園だより 62

Edo-Tokyo Open Air
Architectural Museum



- ◎子宝湯の思い出 江戸東京博物館館長 藤森照信
- ◎特別展「江戸東京博物館コレクション～江戸東京のまちづくり～」
- ◎収蔵建造物紹介ーたてもの園の看板建築たち ⑤武居三省堂
- ◎万世橋交番の仕上げについて
- ◎スケッチブック／たてもの園日誌

子宝湯の思い出

江戸東京博物館 館長
藤森照信



子宝湯移築前（撮影：藤森照信）



子宝湯移築前脱衣場（撮影：藤森照信）



たてもの園内にて子宝湯建設中（撮影：藤森照信）



子宝湯竣工時外観（1993年）



東京の銭湯の絵タイル（撮影：藤森照信）



東京の銭湯にみられる章仙の銘（撮影：藤森照信）



現在はなき大黒湯（撮影：藤森照信）

からだ。

弓道場は立木が無いから建物が密集する下町にはふさわしく、真ん中に大通りを通して両側に神田あたりのいろんな商店を並べればいい。

その下町の配置を決めた時、正面には銭湯がいいと思ったが、具体的に「子宝湯」に決めていたわけではない。

それからしばらくして、林丈二さんから、子宝湯の廃業の話を伝えられ、渡りに舟。七福神の舟。

当時、千住のそのあたりには「子宝湯」、「宝湯」、「大黒湯」の三つの銭湯があった。いずれも唐破風付きの宮型（みやがた）銭湯だった。今はすべて消え、たてもの園に「子宝湯」だけが残る。

千住にあったこの三つの銭湯は、全

体の姿形を見ると作りといい堂々たる

構えといい「大黒湯」は東京」といついいが、しかし唐破風だけの作りについて舟に七福神が載るような彫刻は東京のどこにもなく、「子宝湯」が一番。

銭湯の内側の一番の見どころは貼られているタイルになる。浴室のタイルは戦後貼り替えられていて当時のものではなかったが、移築にあたり入口の腰壁の戦後貼られた板をはがすと、竣工当時のタイル絵が一部残っていた。土

壁の上に直接貼るという戦前の木造建築にしばしばみられる貼り方をしており、一部残った絵から高砂の翁と嫗の絵と分かった。そこで全体の絵柄の復原と再制作を金沢の石田庄太郎氏にお願いした。

東京に残る古いタイプの銭湯のタイル絵を調べると「章仙」のサインと「九谷・鈴栄堂」の印の押されるものが極めて多い。章仙とは石田氏の雅号で、鈴栄堂とは金沢の建材屋を指し、金沢に住む石田氏が戦後、金沢の建材屋の注文に応じ、九谷焼として東京に供給していたのである。

で、石田氏にお願いしたが、タイル制作を止めから年月が経っていたし、老齢でもあって腕は昔に比べ落ちていたのは仕方がない。

なお、戦前から戦後まで、銭湯に絵タイルが貼られることは大都市ではしばしばあったが、しかしだれがどこで制作したかは全く伝わっておらず、戦後の東京の銭湯の絵タイルだけが石田さんのお想によって明らかになつてい

る。鈴栄堂を通して寸法が伝えられ、それを自分の工房で弟子数人とともに制作して鈴栄堂に納めるだけで、東京の銭湯の現場とは図柄を含め何の打ち合わせもなかつたという。

銭湯は調べてみると意外なことが多く、たとえば唐破風付きの「宮型」は、震災の後、東京で始まったスタイルであ

り、東京以外では決して一般的ではないし、浴室の床にタイルを貼らず石の寄席と床屋は一つも残っていないし、

床屋が町の重要施設であり、東京になつてもこの伝統は続いてきたが、戦前

の寄席と床屋は一つも残っていないし、

銭湯も「子宝湯」があるのみ。

江戸東京たてもの園の東ゾーン、下町中通りにある「子宝湯」と出会ったのは、その昔、仲間たちとやつていた「路上觀察」の活動のひとこまとしてだった。たしか復原前の東京駅の古びたステーションホテルに皆で泊まり、入浴は銭湯と決めていたので、昔ながらの銭湯があると聞いて足立区千住の「子宝湯」に出かけた。そして、入るやいなや、

「オッ、ハヤシじゃないか?!」との声が番台から響いた。路上觀察学のメンバーの林丈二と子宝湯の若主人の平岡徳朗さんは中学時代の同級生だったのである。

これが縁となり、銭湯の昔話のあれこれを聞くことになる。東京の銭湯の関係者はほぼすべてが雪国出身者だったと言われる。冬のキツイ水仕事と薪運びを経て、そこの娘と一緒になつたり、貯めた資金を元手に自分

の銭湯を持つようになると、働き手は必ず自分の村の出身者を雇う。こ

ういう循環の結果、雪国出身者が多くなつたという。子宝湯の平岡家は石川県のご出身である。

そして千住のこの地に銭湯を構えたのは、すぐ近くに「千住の遊郭」が位置し、働く女性はここで入浴してから店に出たし、客もそだつた。

「子宝湯」という命名は、待ち望んだ子どもが生まれたのを記念して。

「子宝湯」と出会った後、何年かして江戸東京たてもの園開設の話があり、「全体の配置計画を決めてくれ」とたても園の担当者から急に言われ、そ

の場で描いて渡した。

急に言われてすぐ対応できたのは、子どもを連れてしばしば小金井公園に

出かけ、公園の中につくられた弓道場の中も何度か見学したことがあり、現たてもの園の周辺のあれこれを知っていた



江戸東京博物館コレクション のまちづくり

江戸東京のまちづくり

1993年(平成5)3月28日の開館以来、江戸から東京の歴史を豊富な資料と模型を用いて紹介する博物館として親しまれている東京都江戸東京博物館。現在、大規模な改修工事実施のため、長期間の休館となっています。

今回の特別展「江戸東京博物館コレクション～江戸東京のまちづくり」は、江戸東京博物館の常設展の中からまちづくりを紹介するコーナーを取り上げ、そこで展示されていた資料や模型などを用いて江戸から近現代の東京のまちの変遷を紹介します。

第1章 江戸のまちづくり

1603年(慶長8)、征夷大將軍となつた徳川家康は、幕府の所在地にふさわしい都市とするため、江戸の開発を推し進めました。

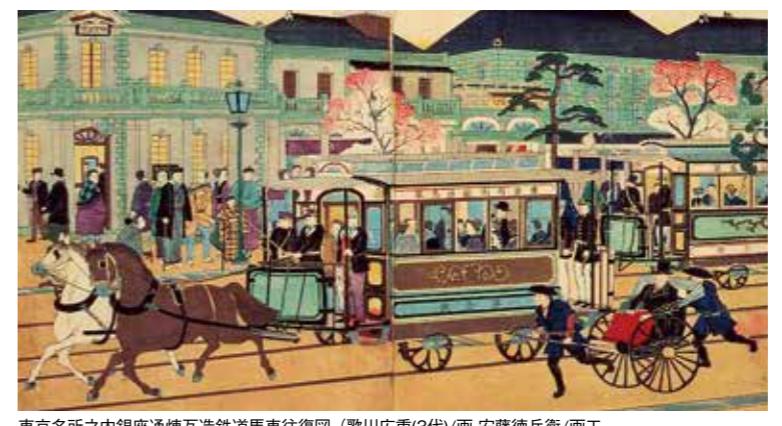


江戸火事図巻 (田代幸春/画 1814年(文化11)12月) ※展示期間中、場面替えあり

た。開発がひと段落してまもない1657年(明暦3)、市街地の過半を焼き尽くす明暦の大火が発生すると、幕府は中心部にあった大名屋敷や寺社を郊外に移転させて名屋敷や寺社を郊外に移転させて江戸幕府の政治・文化の中心地として成熟していきます。ここでは江戸幕府の成立から約260年にわたって榮華を誇った江戸時代のまちの様子を紹介します。

第2章 開化の東京

天下の総城下町・江戸は、100万の人口を抱える巨大都市として栄えましたが、徳川政権の崩壊とともに、その繁栄は失われました。特に江戸の7割を占めた旧武家地の荒廃ぶりは甚だしく、主を失った武家地では、桑の栽培や茶畠への転換が奨励されるなど、都市開発とは逆行するようなこと



東京名所之内銀座通煉瓦造鉄道馬車往復図 (歌川広重(3代)/画 安藤徳兵衛/画工 1882年(明治15)) ※展示期間:10月17日(火)～11月12日(日)

な導入や、旧武家地を利用した都市整備が進んだことから、首都東京は急速な発展を見せました。ここで近代国家にふさわしい首都の建設の中で誕生したまちの様子を紹介します。

第3章 関東大震災と「大東京」の成立

1923年(大正12)9月1日、相模湾沖を震源とするマグニチュード7・9の大地震が関東地方の南部や周辺地域を襲いました。地震発生後、市内各所で火災が発生

整理を行い、現在の昭和通りや靖国通りなどの幹線道路が整備されたほか、橋梁の整備、公園の設置や鉄筋コンクリート造の小学校の建設など、災害に強いまちづくりが着実に進められ、「大東京」へと変貌を遂げた様子を紹介します。

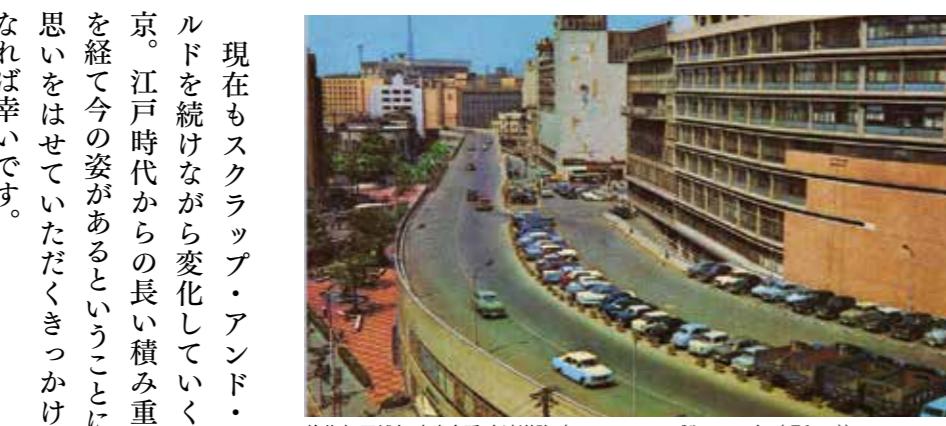
第4章 戦災からの復興

1941年(昭和16)に始まった太平洋戦争は1945年(昭和20)を迎えると、米軍が新たに開発した戦略爆撃機B29による日本

本土への空襲が本格化し、「帝都」東京への空襲も熾烈をきわめました。合計120回にも及んだ空襲で東京は再び焦土となり、太平洋戦争開戦時に約700万だった東京区部の人口は、終戦時には約240万に激減しました。関東大震災から20年あまり、廢墟から復興して世界有数の大都市となつていた東京は、再び壊滅状態となりました。ここでは空襲による深刻な惨禍から、力強く復興していく様子を紹介します。

第5章 1964年東京オリンピックと都市改造

終戦から20年にも満たない1964年(昭和39)に開催された第18回オリンピック東京大会は、93の国と地域から、5000人以上の選手が集まって開催された一大イベントでした。そしてアジア地域で初めて開催されたこの大会で、東京は世界都市への仲間入りを果たしました。ここでは都内各所に配置された各種の競技会場の建設や、モータリゼーションの本格的な展開をうけて不可欠な都



現在もスクランブル・アンド・ビルドを続けながら変化していく東京。江戸時代からの長い積み重ねを経て今の姿があるということに、思いをはせていただきつかけとなれば幸いです。

万世橋交番の仕上げについて

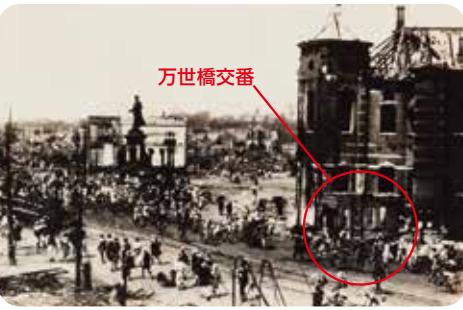


写真2 東京ガスのプレートを外した様子

写真1 塗装調査

画像② 移築前の万世橋交番

画像① 右手に被災した万世橋駅と万世橋交番がうつる関東大震災写真 (萬世橋広瀬中佐銅像前) / 江戸東京博物館蔵

令和4年度は、鍵屋・花市生花店・村上精華堂・万世橋交番の修繕工事を行いました。今回の工事に伴い、万世橋交番の仕上げについて、いくつか発見がありましたので、ご報告いたします。

万世橋交番は、煉瓦造平屋建ての建物で、その名の通り、東京都千代田区神田にある万世橋のたもとに建っていた交番です。建築年は、明治後期だと推測されています。1923年（大正12）に発生した関東大震災では、隣に建つ万世橋駅と共に屋根が焼け落ちるなどの被害にあり（画像①）、この時に木部は一度焼失したと考えられます。修復は1930年（昭和5）の復興事業において行われ、その後、1993年（平成5）に当園へ移築されました。

移築の際、煉瓦造のこの建物は、躯体を解体せずにそのままトレーラーにのせて当園まで運ばれ、移築前の様子（画像②）にならって修理されました。そのため仕上げに関する調査が行われるのは今回がはじめてとなります。以下に調査結果と考察を記します。

1 木部

今回の調査では、まず木部の塗装調査を行いました。そのうち、宿直室の腰壁（北面）の塗装調査をおこなったものが（写真1）になります。この写真から、宿直室の腰壁は現在の塗装色のほか、緑

ついても調査をおこないました。各室の腰壁や宿直室の流し台にあります。この写真から、宿直室の腰壁（北面）の塗装調査を行いました。そのうち、宿直室の腰壁（北面）の塗装調査をおこなったものが（写真1）になります。

星に「G」という文字が書かれたプレート、当時の東京ガスの需要家マークが張られています。こちらを外したところ、下から木地の時代があつたと考えられます。

また正面入口の上枠には、赤い木部が一度緑色で塗られていました。時代があつたと考えられます。また正面入口の上枠には、赤い木部が一度緑色で塗られていました。時代があつたと考えられます。

この最も古いものだと判明しました。このことから、関東大震災後の修復時において、木部はすべて本地の見える茶系の塗装で仕上げられていた可能性も考えられます。補足しますと、東京ガスのプレート（琺瑯引き）は、主に昭和初期から戦前期に使用されていたもので、前述の復興事業の時期と一致します。当園では1927年（昭和2）に建築された武居三省堂でもみることが出来ます。

木部の塗装については、関東大震災で一度木部が焼失していること、また各所の色味や時代との整合性などを考慮し、移築前の様子にならっておりますが、今回の調査結果を踏まえつつ、建物をご見学いただければ幸いです。

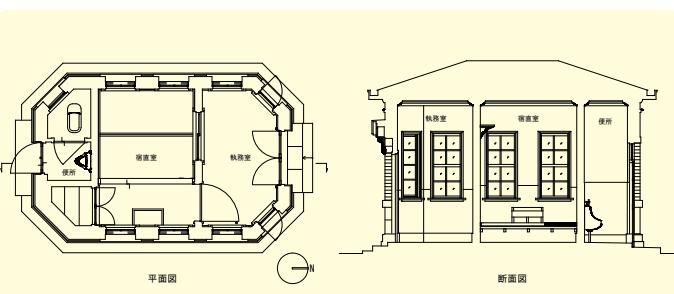


写真4 向かって左半分は銅板に塗装が施されている様子。右半分は塗装を落とし、銅板が現れている

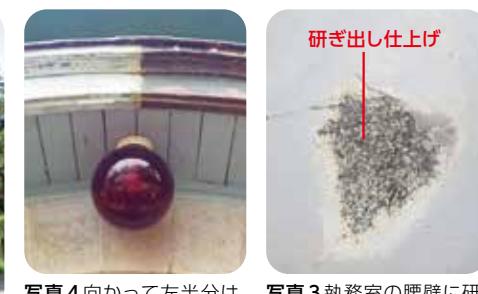


写真3 執務室の腰壁に研ぎ出し仕上げが現れた様子

収蔵建造物紹介

たてもの園の看板建築たち 5 武居三省堂

江戸東京たてもの園の東ゾーンを大きく特徴づける看板建築たち。今までこそ6棟が建ち並び、壮观な風景を呈していますが、たてもの園の開園当初は、たった2棟の看板建築が寄り添うように建っていました（写真①）。向かって右側が、連載の第一回でご紹介した花市生花店、そして左側が今回の主役、武居三省堂（文具店）です。



写真①

この2棟、まるで最初からくっついて建っていたように背の高さも幅もぴったりですが、もともとは、花市生花店が神田淡路町一丁目、武居三省堂が神田須田町一丁目というように、離れた場所に建っていました。どちらも、間口に対して高さが非常に高いという看板建築の特質を顕著にもった建物ですし、2棟合わせてもまだ間口が足りないので、武居三省堂の北（向かって左）側にコンクリートの耐震壁が立っているのが見えるでしょう（現在は「店蔵型休憩棟」が建ち、耐震壁は取り払われています）。

武居三省堂の特徴を詳しく見てみましょう。ファサードの大部分はタイル貼りで、柱・戸袋まわり・庇などは銅板で包まれています。屋根は、正面側から見ると一般的な切妻屋根のようですが、建物の裏側にまわると、ギャンブル（腰折れ）屋根になっているのがよくわかります（写真②）。このような屋根の形状は、建物の3階内部にも反映されていて、この階が当時は屋根裏部屋としてつくられたことがよくわかります（3階内部は非公開部分のため、たてもの園HPの「360度パノラマビュー」で見てみましょう！ <https://www.tatemono-en.jp/panorama/JP/E6/>）。

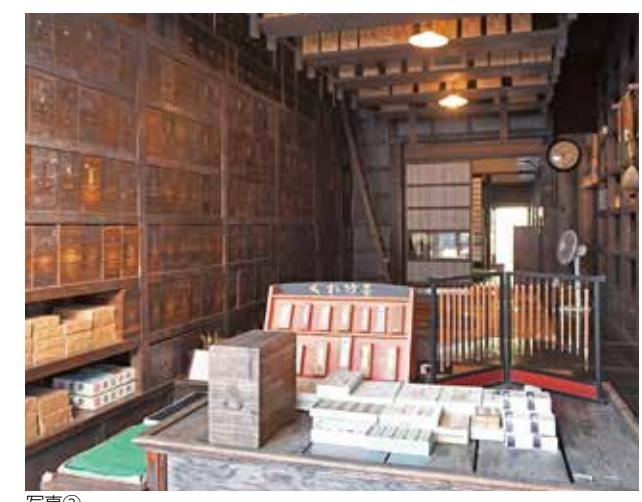
建物の正面からお店に一歩入ると、左右の壁から天井まで、造り付けの商品棚が空間全体を埋め尽くして

いて、その迫力に思わず息をのむでしょう（写真③）。この建物、多いときには、従業員を含め15人程度が生活していました。食事は店の奥の三畳間で交代でとり、2階から上で家族が、店舗部分で従業員が寝起きをしていたそうです。それだけの人が生活していたのですから、たださえ狭い敷地をいかに有効活用するかは、この建物最大のテーマだったでしょう。地下には商品の荷解きや荷造りをする地下室もあり、出入りは店先の陳列台の下に隠された階段から行いました。武居三省堂に展開されているのは、まさにこれ以上は考えられない「収納の美学」なのです。

（研究員 米山勇）



写真②



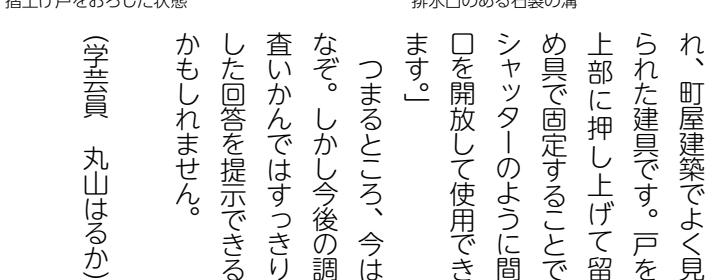
写真③

鍵屋、石づくりの溝のなぞ

スケッチブック

受付や巡回をしているスタッフは、園内の気になる箇所について、日々お客様よりお声掛けをいただきます。そのため、よく聞かれる質問には間を置かずに対応であります。あらかじめ回答を準備しています。しかし、すぐに回答が難しいときには、レンズとして処理し、参考資料や聞き取り記録などに当たって調べることになります。中には現時点でも調べてもわからないという回答もあります。

ある時、お客様から鍵屋について、次の



つまるところ、今はなぞ。しかし今後調べかんではつきりした回答を提示できることもありません。

(学芸員 丸山はるか)

のような質問がありました。

「鍵屋の入口内側にある石づくりの溝は何に使われるのでしょうか。手洗いの排水?」

対して、園からは次のように回答しました。「指摘の石製の溝は、東から西へ勾配がつけられ端には排水口があることから、排水のための溝だと思われます。鍵屋にガラス引き戸が付けられたのは建築からしばらく経てからと考えられ、それまでは、外に面していたのは擗上げ戸か、もしくはガラスが嵌つてない格子戸だったと思われますが、確かなことは不明です。溝の縁（室内側）におろした擗上げ戸を固定し、雨水が室内に入るのを堰き止めていたようです。なお、擗上げ戸とは、揚げ戸とも呼ばれ、町屋建築でよく見られた建具です。戸を上部に押し上げて留め具で固定することで、シャッターのように間口を開閉して使用できます。」

2023年(令和5)	6/27(火)~8/20(日) 綱島家年中行事「盆棚展示」
4/3(月)	臨時開園
4/8(土)・9(日)	伝統工芸の実演「鎌簪／花簪」
4/18(火)~5/7(日)	こいのぼりの展示
4/22(土)	ミュージアムトーク「公衆浴場と子宝湯」
5/1(月)	臨時開園
5/4(木・祝)・5(金・祝)	こどもの日イベント
5/13(土)・14(日)	伝統工芸の実演「つまみ簪／鍛金」
5/27(土)	ミュージアムトーク「特別展『日本のタイル100年—美と用のあゆみ』みどころ」
6/4(日)	特別展関連事業 ワークショップ「タイルで工作してみよう!」
6/7(水)	綱島家年中行事「梅干しづくり」
6/10(土)・11(日)	伝統工芸の実演「江戸手描友禅／江戸刺繍」
6/24(土)	ミュージアムトーク「前川國男邸」
	7/4(火)~9(日) 七夕飾り
	7/8(土)・9(日) 伝統工芸の実演「江戸象牙／東京三味線」
	7/19(水)~9/10(日) ちょっと涼しいたてもの園
	7/21(金)~30(日) 綱島家年中行事「梅の土用干し」
	7/22(土) ミュージアムトーク「たてもの園でタイルめぐり」
	7/23(日) 特別展関連事業 ワークショップ「光るどらだんごを作ってみよう!」
	8/5(土)・6(日) 夜間特別開園 たてもの園 下町夕涼み
	8/12(土)・13(日) 伝統工芸の実演「江戸扇子／つりしのぶ」
	8/26(土) ミュージアムトーク「花市生花店と東京の花屋」
	9/9(土)・10(日) 伝統工芸の実演「表具／江戸簾」
	9/16(土)~12/17(日) 特別展「江戸東京博物館コレクション～江戸東京のまちづくり～」
	9/23(土・祝) ミュージアムトーク「旧自証院靈屋から考えるジェンダー」
	9/26(火)~10/1(日) 綱島家年中行事「十五夜飾り」

4月～9月 9:30～17:30
10月～3月 9:30～16:30
※入園は閉園の30分前まで

毎週月曜日（月曜日が祝休日の場合はその翌日）
年末年始

JR中央線「武蔵小金井」駅よりバス5分 北口2・3番のりばから→「小金井公園西口」下車、徒歩5分
西武新宿線「花小金井」駅よりバス5分 「南花小金井」（小金井街道沿い）から武蔵小金井駅行き→「小金井公園西口」下車、徒歩5分
※ご来園の際は公共交通機関をご利用ください。当園専用駐車場はありません。車の場合は、小金井公園内の有料駐車場をご利用ください。

入園料

一般 400円(320円)
65歳以上の方 200円(160円)
大学生(専修・各種含む) 320円(250円)
高校生・中学生(都外) 200円(160円)
※()は有料入園者20名様以上の団体料金
小学生以下および都内在住・在学の中学生は無料

